國學院大學学術情報リポジトリ

中国青海省の漢民族の葬礼と担い手：湟中県李家山鎮新添堡村の事例から

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 李, 生智
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001628

中国青海省の漢民族の葬礼と担い手
―湟中県李家山鎮新添堡村の事例から―

Funerals and Bearers of Han People in China's Qinghai:
A Case Study of Xintianbu village, Lijiashan Town, Huangzhong City

李　生　智

キーワード：青海省の漢民族の葬礼　農村部の土葬　担い手　社会距離　地域社会
关键词：青海省汉族的葬礼　农村地区的土葬　运营者　社会距离　地域社会

要旨

1980年代の改革開放以降における中国の葬礼の特徴には、「殯喪改革」による火葬が都市部を中心での展開と従来の葬儀が農村部での復活の２つの大きな変化がある。中国の北西部に位置する青海省は、多民族が混在する地域として知られているが、省内の東部に居住している多くの漢民族が人口の54％を占めている。省内最大の民族集団としての漢民族の中に1950年代の以前から移住してきたの多くの人々が広い農村部に居住している。

現在政府が提唱している火葬が全国範囲で推進し、青海省の省都である西寧市などの都市部でも火葬が実施されている。しかし、農村部の漢民族の間では土葬が行われており、従来の葬礼の作法の通りの葬送習俗が確認することができる。こうした葬礼には多くの地域社会の人が関与し、複数の宗教的職能者を招集する。そして、死者を宗族の共同墓地に埋め、族譜に記名する。

このような葬送習俗が農村部の漢民族の間に根強く行われたのは、他の少数民族との違いを現すと推測できる。漢民族の葬礼が血縁関係者、姻戚、地縁関係者、職能者など多くの人々が連動的に行う。死者との血縁関係の親疎と社会距離の遠近で、葬礼の関与者が担う役割が異なる。

摘要

自1980年代的改革开放以后，中国的丧葬有两大特点，因为殡葬改革而在城市中大力推广施行的火葬，以及在农村地区复活的旧时丧葬习俗。位于中国西北地区的青海省是一个多民族省份。居住在省内东部的汉族人口占全省人口总数的54%，是省内最大的民族团体。其中现居住在广大农村地区的汉族多为1950年代以前从全国各地迁入。

现在由政府所倡导的火葬在全国范围内推进实行。青海省的省会西宁市的市区也已普及实行了火葬。然而，在市区周围的广大农村地区，依旧按照旧时的丧葬习俗进行土葬。这种农村地区的葬礼是由众多地域社会的人参加，同时也会召集复数的宗教活动者举行各种仪式。此后，会将死者的遗体埋葬于宗族的共同墓地，且会将死者的名字记录

于族谱之上。

这种丧葬习俗之所以能够在农村地区的汉族之间扎根，其原因是为了体现出与周边的少数民族的不同。这种葬礼是由血缘关系者，姻戚，地缘关系者，职业者等众多人群联动举行。同时，葬礼上会根据和死者血缘的亲疏，社会距离的远近，葬礼参加者所要扮演的角色便不同。

はじめに

本研究で取り上げる地域である青海省は中国の西北部にあり、多民族地域として知られる。漢民族は、その中でも省内人口の最多数を占めており，主に省内東部に位置する河湟地方に居住している。

中国の漢民族の葬礼については、すでに複数の研究がある。しかし、多民族地域である青海省における漢民族の葬礼を取り上げた歴史資料が主で民俗学の視点による先行研究は極めて少ない。一九八九年、北京図書館が中国各省の地方志と民俗資料を用いて、出版した『中国地方志・民俗資料匯編』の『西北巻』にも、少数民族の民俗風習などを記述した資料は多いが、漢民族の民俗に関する資料がほぼない[(1)]。

現在、中央政府および地方政府による「殯葬改革」が推進されている。この「科学的・文明的」な葬送習俗の普及することを目的の「殯葬改革」は、葬礼の作法は追悼式へ、土葬を火葬へ、「公墓」などの共同墓地への利用など方面から全国に展開されている。この葬儀変革によって、古い葬礼のあり方と葬礼の担い手が大きく変わると推測できる。この葬儀改革による変遷を確認するため、現在まだ行なわれている古来の葬礼の実態とその葬礼の運営の姿、担い手などを確認する必要がある。

ところが、中国における葬礼の担い手についての先行研究としては、田村和彦［2006］が陝西省を、山本恭子［2014］が江蘇省をそれぞれのフィールドとした葬礼についての現地調査に基づく論考がある。葬礼の統括者について、田村氏は陝西省中部地域には①同じ地域の年長者②村の村民小組の組長から選ばれるとし、山本氏は江蘇省北部地域には①同じ村の知識人②紹介された寿材店の経営者が担うとした。

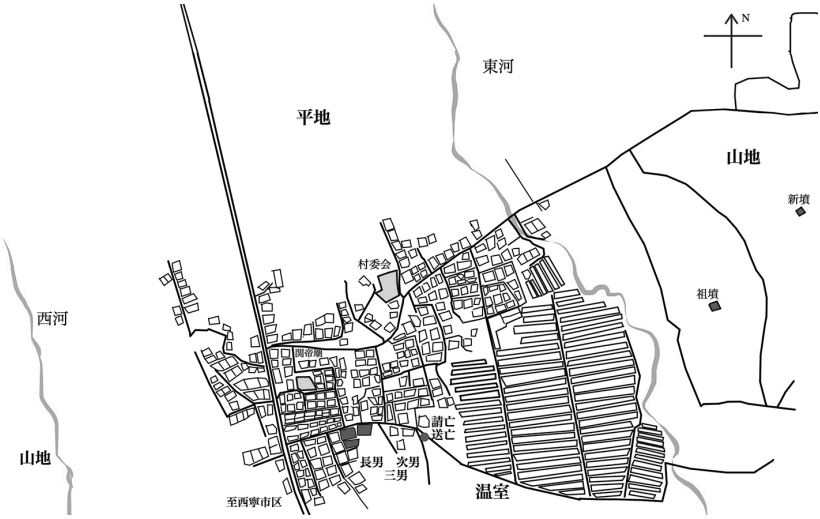
これらの研究は、それぞれの地域における伝統的な葬礼の流れについて報告し、そこからその地域における葬礼とその担い手について分析が試みたものであ

る。しかし、その報告は、具体的な葬礼の事例を基づいたものではなく、①地域の情報②社会組織の情報③葬礼における人々の役割分担と具体的な情報など、葬礼とその担い手の分析に必要とされる重要な情報が欠落している。そのため、葬礼の担い手と死者の関係性、各担い手の葬礼における役割と関与する時期などの実態などを見えない。

そこで、本稿では、青海省湟中県にある漢民族の村落で行なわれた葬礼について、具体的な事例から葬礼の実態を詳細に報告するとともに、その事例における葬礼担い手と死者の関係性と役割について分析する。

一、湟中県李家山鎮新添堡村の概要

本稿で取り上げる新添堡村がある湟中県は、青海省の省都である西寧市の管轄する県の一つであり、十個の鎮と二個の郷と三個の民族郷によって構成されている[(2)]。その中の李家山鎮は、西寧市まで車で三十分の距離にある。李家山鎮は、その東西を山に挟まれており、西河と東河の二つの河が流れていることから、「双龍川[(3)]」や「雲谷川」とも呼ばれる。李家山鎮は32の村で構成され、主な生業は農業である。



地図１　湟中県李家山鎮新添堡村の地図

新添堡村は李家山鎮の行政村の一つであり、村内には李、楊、景、韓、簡などの姓の245戸がある。地図１に見るように、村の中央部に位置する「関帝廟」が村民から祀られている。本事例の葬礼は、そのうち李家山鎮新添堡村の李氏一族のものである。李氏一族は共同の墓地は村から離れたところにあり、婚出した女性以外は李氏一族の男女は死亡後共同墓地に埋葬できる。共同墓地を祖墳と呼び、墓地容量の制限で新墳を作り始めの動きがある。また、李氏一族が共同の族譜が用いる。

二、二〇一八年九月に行なわれた葬礼の事例

（一）死者の李氏張守英

本稿で取り上げる葬礼は、大通県橋頭鎮の出身の女性である李氏張守英[(4)]の事例である。張守英は、1953年農暦二月初二に生まれた。 1974年に李善財と結婚し、その間に３人の息子と１人の娘が生まれた。2018年８月から心臓病で西寧市の市立第三人民病院に入院し、2018年９月９日に病院で死亡した（享年65歳）。死後、遺体が病院から自宅へ運ばれ、同年９月10日から９月13日にかけて葬礼が行なわれた。

（二）葬礼への関与者

本事例の葬礼に関与した人々は、死者・張守英との関係により、Ａ家族、Ｂ党家、Ｃ親戚、Ｄ荘員、Ｅ宗教者と職能者の五種類に分けられる（図１参照）。

Ａ家族　家族は、死者の配偶者と男性子孫（その配偶者含む）と未婚の女性子孫のことである。死者（図中・網掛けの丸マーク）の夫である李養財（①）は2012年にすでに死亡していた。長男である李爾科（②）とその妻の張蘭（③）の間に一人の息子、李偉霖（⑧）がいる。李偉霖（⑧）は死者の長孫にあたり、その妻の羅孝萍（⑨）の間に一人の息子、李永喆（⑫）がいる。長孫の長男である李永喆（⑫）は死者の曽孫にあたる。死者の次男である李爾勝（④）は、その妻の李海清（⑤）との間に一人の娘、李晶霖（⑩）がいる。死者の三男である李爾均（⑥）は、その妻の薛盈存（⑦）の間に一人の娘、李春霖（⑪）がいる。死者は、生前には三男の李爾均（⑥）と一緒に生活していたため、死亡後の葬礼はその三男の家で行なわれ

た。

B党家　党家[5]は、死者の夫（①）である李氏一族のことである。人数が多く全員を紹介することが難しいため、ここでは死者の夫と血縁関係が近い重要な党家の情報に限って紹介する。死者の夫の弟の李養民（㉑）夫婦、李養栄（㉓）とその妻・山玉蘭（㉔）、李養昌（㉕）とその妻・汪洪秀（㉖）、および各夫婦の息子、李爾軍（㉙）、李爾元（㉚）、李爾傑（㉛）などがいる。

C親戚　親戚は、李氏から他氏へ嫁いだ死者夫（①）の姉妹・娘・姪や、李家へ嫁いだ死者・張守英の実家である張氏一族などのことである。それらの親戚は、嫁の授受関係（女性の婚出婚入関係）によって「上位親戚」「平等親戚」「下位親戚」の三種類に分かれる。上位親戚は、一族の男性子孫の配偶者の実家一族（娘家）であり、本事例の李氏一族にとっては、李氏一族に嫁いてきた死者である張守英の実家である張氏一族、そのうちの一族から出ていない兄弟などとその家族がそれにあたる。平等親戚は、一族の男性子孫の配偶者の実家一族（娘家）のうち嫁いだ女性とその家族であり、本事例の李氏一族にとっては、李氏一族に嫁いてきた死者である張守英の実家である張氏一族、そのうちの他氏一族へ嫁いだ姉妹などとその家族がそれにあたる。下位親戚は、一族から嫁いだ人とその家族であり、本事例の李氏一族にとっては、李氏一族から嫁いだ女性とその家族がそれにあたり、そこには死者の娘とその家族が含まれる。これら三種類の親戚は、後述するように葬礼での役割と関与する期間がそれぞれ異なる。

本事例における三種類の親戚の詳細な情報は、次のとおりである。上位親戚は、すでに死亡していた兄の張守邦（⑱）の妻、弟の張守義（⑲）、外甥の張啓元（⑳）であった。張守義と張啓元は、「骨主」として「験孝」の儀礼で需要な役割を果たした（「骨主」と「験孝」については後述する）。平等親戚は、死者の姉妹とその家族が本事例の葬礼に関与したが、詳細は把握できなかった。下位親戚は、死者の娘である李爾芳（⑬）とその家族（夫⑭、子⑮⑯）、死者の夫の妹である李養英（㉗）とその家族（夫㉗、子㉜㉝）であった。

D莊員　家族、党家、親戚以外に、同じ村に住む人を莊員と呼び、葬礼にも関与する。その多くは弔問・埋葬のみに参加するが、「喪主」[6]と呼ばれる死者の死亡から埋葬まで参加する役割がある。本事例では、主喪主は簡文禮（㉞）が、副喪主は韓生季（㉟）が務めた。その二人の喪主以外の膨大な人数の莊員は葬礼に関与したが、その詳細は把握出来なかった。

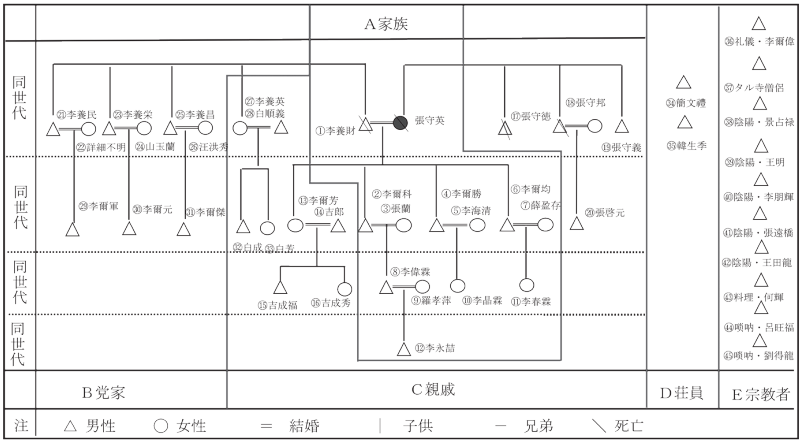


図１　死者（李氏張守英）とその葬儀の担い手との関係

E宗教者と職能者　本事例の葬礼には、三種類の宗教者と二種類の職能者が関与した。宗教者は、儒教の礼儀先生である李爾偉（㊱）、チベット仏教の寺の僧侶（㊲）、道教の陰陽先生である景占禄（㊳）、王明（㊴）李朋輝（㊵）、張遠橋（㊶）王田（㊷）などの七人であった。職能者は、料理人の何輝（㊸）、唢呐（ソーナ・suǒ nà）を演奏する呂旺福（㊹）と劉得龍（㊺）であった[7]。

（三）葬礼の流れ

死亡以前【死亡への準備】

〈寿衣と棺桶の準備〉　死者・張守英の棺は、2012年10月に三人の息子が用意した（写真１参照）。本来は60歳の年に棺を用意することが通例であるが、死者の夫である李養財（①）が生前に棺がないまま2012年に60歳で死亡したため、大工（木匠）と画工（絵匠）を招請して棺桶を制作し、それに併せて張守英の棺桶も用意された。また、死者の夫が死亡した際に李氏一族の祖墳の土地が足りなくなったため、三人の息子は、本事例とは異なる陰陽先生に新しく作る墓地の位置を勘定してもらい、新墳を作った。新墳は、古い祖墳と同じように東河の先の山地に位置する。

寿衣は生前の張守英と娘の李爾芳（⑬）が用意した。寿衣は、購入した肌着が一着、手作りの綿入れの厚着が六着、全部で七着である（写真２参照）。厚着の

寿衣は、全部が錦布で作られ、左襟を右襟の下にする左衽の着物である。靴は蓮を刺繍した布靴である。

〈白綿布の購入〉　生前の張守英は、葬礼に使う孝[8]を縫うなどに使う白綿布を寿材店から購入した。

九月九日【死亡当日の動向】

〈死亡〉(7:00)　西寧市立第三人民病院医者が張守英の死亡通知書を出す。死者の三人の息子が死者の死亡を確認した後、遺体を病院から三男の家に運んだ。その際、死者の長男李爾科(②)は、同村の簡文礼(㉝)と韓生季(㉞)に連絡し、喪主を依頼した。また、同村に居住する党家に張守英の死亡を知らせた。

〈東家[9]の構成〉　喪主を頼まれた簡文礼と韓生季、張守英の死亡通知を受けた党家の人々が死者の三男の家に集まり、東家という葬礼を運営する組織を構成した。二人の喪主は、死者家族の意向を聞き、葬礼のまとめ役として葬礼を運行することをその場の人々へ伝えた。また、党家の青壮年を中心の全員が葬礼を進行させるため労働を提供する。その中から統率力のある人が推薦によって「大東」として選ばれ、喪主の指示で東家を統率して葬礼を進行させた。本事例の大東は党家の李爾傑であった(㉚)。大東の判断により、東家の男性は食材・品物の購入、喪家の設営、宗教者の使いなどの仕事を、女性には東家の食事と弔問料理の準備などのそれぞれに役割を任された(表1参照)。東家の役割には、葬礼を運

表1　2018年9月の死者李氏張守英の葬礼での東家の役割分担

役割名称	葬礼での役割分担の内容	人数	死者との関係
喪主	葬礼の統括者、葬礼進度の把握	2名	莊員
大東	東家のリーダー。葬礼の実行責任者	1名	党家
帳房	費用の収支の管理と香典の記入	1名	党家
挖坟坑	墳に墓穴を掘る	3名	党家
库房	品物の管理	1名	党家
回礼	哭孝の引き止めと香典返しの準備	2名	党家
使唤	宗教職能者の使い	4名	党家
迎客	弔問客の迎接	3名	党家
支客	弔問客を案内し、食事の勧誘と酒の付き合い	18名	党家
帮厨	料理人の手伝い	8名	党家
掌盘	料理の搬運	3名	党家
茶水	酒とお茶の用意	1名	党家
雑用	雑用。適宜、準備と手伝い	数名	党家

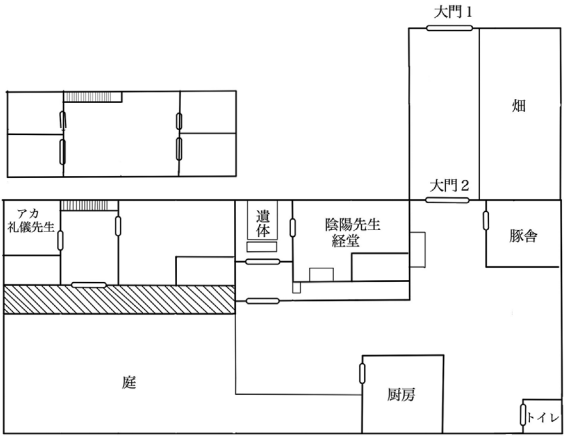


図２　喪家の間取り図

営するには香典などを記入する「帳房」一名、「挖坟坑」三名、宗教職能者使い合計四名、「迎客」三名、「支客」十八名、「帮厨」八人、「掌盘」三名、酒温めとお茶の準備一名などがある。その以外の東家は、適宜準備などを手伝った。

〈寿衣の着用と停殯〉　死者の遺体を三男の家に運んだ後、集まった喪主と東家が家の中堂[10]に飾られていた神仏像の絵を取外し、遺体の頭を奥に向けて安置した（図２参照）。死者の夫の兄弟の配偶者である女性三人（㉒、㉔、㉖）が、死者に七着の寿衣を着せた。東家が西寧市城北区大堡子鎮の寿材店から水晶棺[11]を借りてきた後、遺体をその中へ納めた。水晶棺の頭のところテーブルを置き、箸を一膳突き立てる山盛りの半熟の米飯を置く。このご飯を「倒头饭」と呼ぶ。死者の遺体が安置された中堂を、霊堂として飾り付けた。

喪家の間取りは図２に見るように、屋家が二つの建物がある。古来の旧屋（一階建）と新屋（２階建）があり、死者の遺体を旧屋の中堂に置き、霊堂として使われる。旧屋の右側の部屋に陰陽先生の経堂を設置した。また、新屋は２階建で、一階の左側の部屋に礼儀先生とアカの場所として使われている。

〈宗教者の召集〉　二人の喪主は死者の家族の意見をふまえて、葬礼に必要な宗教者と職能者を招請した。死者の家族は、五人の陰陽先生（道教）、一人の礼儀先生（儒教）、一人の僧侶（チベット仏教）、二人の唢呐匠（唢呐演奏者）、一人の料理人を希望した。

同村で陰陽先生として活動している景占禄（㊳）は、喪主から連絡を受け、死者の生年月日と死亡時期から占卜で葬礼と埋葬の期間を決めた。喪主から五人の陰陽先生に経事をして欲しいと伝えられた景占禄は[7]、知り合いである四人の陰陽先生を連絡した。さらに、喪主は隣の河湾村の礼儀先生の李爾偉（㊱）、チベット仏教寺院であるタール寺の僧侶（㊲）、同鎮の唢呐匠の呂旺福（㊹）と劉得龍（㊺）、料理人の何輝（㊸）を招請した。

〈死亡の通知〉　死者の息子は、親戚に電話で死亡と葬礼の日程を連絡し、葬礼に参加するようにお願いをした[12]。

〈タール寺僧侶の読経〉（18:30～20:00）　喪主から連絡を受けたタール寺の僧侶が三男の家に来ると、死者を安置する霊堂のとなりの部屋で読経し、読経を終えるとすぐに帰った。喪主は、僧侶へ五百元を報酬として寄付した。

九月十日【死亡後翌日の葬礼準備】

〈喪主と東家の集合〉（8:00～9:00）　八時に喪主と東家が三男の家に集合し、朝食を終えると墓穴掘り、品物購入、宗教者・職能者の迎えなどそれぞれの準備を始めた。

〈宗教者と職能者の到着〉（8:30～9:00）　八時半頃から宗教者と職能者が順に到着し、喪家が用意した朝食を終えると、喪家の設営、弔問料理のメニュー設定など、それぞれの仕事を準備始めた。

〈墓穴鑑定と堀り〉（9:00～12:00）　陰陽先生の景占禄（㊳）が東家の挖坟坑（墓穴堀り役）の三人と墓地へ向かった。陰陽先生が李氏一族の新墳に死者の棺を埋める墓穴の方角を鑑定し、その鑑定に従って三人の東家が墓穴を掘った。

〈訃告と請帖〉（9:00～12:00）　礼儀先生の李爾偉（㊱）が死因・死亡日などを記入して訃告を、葬礼を行なう日程を記入して請帖を、それぞれ用意した。喪主の韓生季（㊺）は、訃告と請帖を手にして、死者の実家である張氏一族に葬礼への出席をお願いした。

〈喪家の設営〉（9:00～13:00）　礼儀先生は訃告と請帖を書いたあと、喪家の各扉に貼る対聯[13]、死者の位牌など用意した（写真１と写真２参照）。主な三幅の対聯の内容は表２で示す。陰陽先生は読経する際の経壇（写真３参照）を霊堂の隣部屋に設置し、引魂幡[14]（写真４参照）などを準備した。唢呐匠は家の入り口のところに座り唢呐を演奏した。陰陽先生と礼儀先生が喪家の設営を表３参照。

写真１　礼儀先生による位牌

写真２　礼儀先生による対聯

写真３　陰陽先生による経壇

写真４　陰陽先生による引魂幡

表２　礼儀先生による対聯の内容

番号	場所	内容
1	大門	上聯:欲聞教誨杳無音 下聯：想見音容雪万里 横批：痛哉愁哉
2	部屋ドア	上聯:精神常与天地存 下聯：英霊永垂宇宙間 横批：魂帰仙郷
3	霊堂	上聯: 寿近六旬昔日艱苦扶児育女名著千秋 下聯：樹高千尺根基深遠枝繁葉茂花開万朶 横批：寿終内寝

表３　陰陽先生と礼儀先生の設営

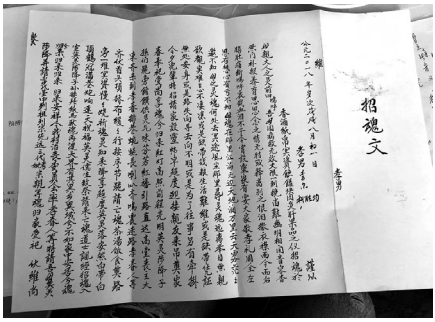
場所	礼儀先生	陰陽先生
門・ドア	対聯	
霊堂	位牌	
庭	銘旌	王霊官の幡
他の場所	棺桶と族譜に記名	引魂幡

〈弔問料理の準備〉（9:00～18:00）　死者とその家族は、親戚の人数などをふまえ葬礼への参加者を二百人超、二十五卓分の料理（一卓＝八人分）とした。料理人は喪主とメニューを相談しながら料理に必要な品物や蔬菜などのリストを作り、東家の人はそのリストに沿って市場で品物を購入した。品物が揃うと、料理人は手伝いの女性東家とともに弔問料理の仕込みをした。

〈喪服の準備と着用〉（9:00～13:00）　東家の年配女性は死者が生前に用意していた白綿布で喪服の孝を縫った。喪服の孝は右襟を左襟の下にする右衽の着物である。死者の家族の男性（息子、孫、曽孫）は髪を剃り、女性（息子の妻、孫息子の妻、未婚の孫娘）はアクセサリーなどを取り外して、喪服の着用することを待つ。

〈成孝〉（14:00）　嗩吶匠が嗩吶を演奏し、死者の家族、党家、喪主が喪服を着用した。喪服に着替えた死者の家族は、それぞれ「孝子」「孝媳」「孝孫」「孝孫媳」「孝曽孫」として、喪主の指示でこれからの行なう葬礼の多くの儀礼に参加する。喪服を着用している間は、家族は基本的には会話と飲食が禁じられており控える。また、この成孝の時点から、葬礼の運営と進行に一切関与しない。儀礼に参加する以外は霊堂に跪く。家族、党家、喪主の喪服の様式などの詳細は後述する。喪服を着用後、喪主の引導で死者の家族、党家が一列に並び、礼儀先生・陰陽先生による請亡の儀礼を待つ。

〈請亡の準備〉（14:00）　家族と党家が喪服を着用する一方、礼儀先生、陰陽先生、喪主と東家は、次の請亡の儀礼の準備をそれぞれ行なう。礼儀先生は、「招魂文」、祭品（供え物）、爆竹などを準備する。祭品は、香（線香）、酒、紙帛（紙を巻いた帛の象徴するもの）、冥資（冥幣）、饃饃（饅頭）、塊肉、炙肝、果盒、水果、糖、茶、椒塩である。陰陽先生のうち三人は、経壇で「指路経」と唱える。残る二人は、麺灯（小麦粉で作られた灯）、引路灯、摂招文書（霊魂を呼ぶ文章。雄鶏の血）などを準備する。喪主と東家は、洗面器の中に死者の位牌を挿している饅頭、死者の遺影、洗面用具（歯ブラシ・タオル・くし）を入れ、この洗面器と死者が生前に愛用した上着とを一緒に椅子に置き、紅布でカゴの形に作る。（写



左：写真５　死者の魂を乗せるカゴ

上：写真６　礼儀先生の「招魂文」

図３　請亡列

儀先生は紅布を肩に横かけ、陰陽先生と唢呐匠は白布を腰に縛る。その後、請亡の列を組んで村境まで祖先の霊魂を迎えに行く（地図１参照）。請亡の列には、喪主、唢呐匠、東家、家族と党家、陰陽先生と礼儀先生、東家が加わる（図１参照）。請亡の列の先頭には、喪主の韓生季（㉟）がおり請亡行列を指定する場所へ引導する。続いては唢呐を演奏している二人の唢呐匠、かごを担いでいる東家の男性二人、冥弊・花輪などを持ち東家数人、頭に上まで一本の白布を挙げる死者の家族と党家の人々である。死者の長男は引魂幡を、次男が死者の位牌を置いてある御盆を持つ。その後は宗教者の陰陽先生と礼儀先生である。五人の陰陽先生は鑼（ツア・chǎ）と鈸（バツ・bó）、木魚、鼓、鎮壇木と笏を持つ。最後は粥がある釜と礼儀先生が使う祭品を持つ党家が続く。

請亡行列が唢呐の声で、奏祖墳と新墳の方向を向けの村境の請亡の場所（地図1）に向かう。指定場所に着いたら、喪主と東家の人が麦の藁に火をつけ、冥弊を燃やす。火の後方にテーブルを置き、その上に死者の位牌、礼儀先生が使う祭品、麺灯（小麦粉で作られた灯、灯油は油菜のキャノーラ油）、綿灯（乾燥した木の枝に棉を巻き、キャノーラ油で浸透したもの）などを置く。テーブルの右側は

礼儀先生で、左側が礼儀先生に手伝いする東家が立つ。テーブルの後ろの方に死者の三人の息子が一例（長男が正中、次男と三男が長男左右側）に並び、長男が引魂幡持ち跪く。死者の三人息子の後ろには長孫が先頭で、死者の家族と党家の人が一列に並んで跪く。請亡行列の最後尾にはテーブルセットを置き、五人の陰陽先生が読経する。

先頭の喪主が爆竹を鳴らした後、礼儀先生が「招魂文」（写真6参照）という文章を読む。招魂文の中に「儒生が祭祀、道士が誦経を行ない、魂を室に招く」という内容がある。その後、長男の手で祭品を火の中に入れて焼く。

礼儀先生の行事が終わると、列の最後尾の陰陽先生が「召摂科儀」という招魂の儀礼を行なう。五人の陰陽先生が経典を唱えた後、「太上沐浴度魂真符」を読み上げる。その後五人の陰陽先生の中で景占禄が引魂幡を持ち振り、「大聖救苦天尊、礼奉请亡母李氏张守英之亡灵回府」という呪語を唱える。その後、事前から準備した「霊宝天尊大法司」という文章を行列最先端の火に焼かす。

陰陽先生が全部のお経を唱えた後、東家の人に「行列が家に戻る」と命令する。請亡列は喪主、唢呐匠、礼儀先生、白布を頭の上にあげる家族と党家の人々、陰陽先生、死者のかごを持ち東家とである。行列の最後の東家は木の枝の13本の灯に火をつけ喪家までの道両端に挿す。その人以外、別の二人が鍋のお粥を道に投げ捨てる。

行列が家に入ると、死者の遺影などを入れたかごを霊堂の前に置き、陰陽先生がお経を唱えながら、歯磨き、クシなどを持ち、死者の遺影に化粧の真似をする。陰陽先生の儀礼の後、東家の人がかごなどを下げ、死者の位牌を霊堂に置き、礼儀先生が死者三人の息子を呼び、供物を霊堂に供える。その後、礼儀先生の号令で家族と党家の人々が三回の跪礼をする。後には、家族と党家の人々は男女別（男左女右）で死者の遺体の両側に跪く。家族と党家の女性はこの時、「哭孝」[15]する。

〈守霊〉　次の日の行事まで家族の全員が棺桶の両側に跪く。

九月十一日【死亡後三日目の弔問】

〈喪主と東家の集合〉（8:00～9:00）　喪主と東家が集合し、食事をする。

〈銘旌を立てる〉　礼儀先生が赤布（2.5m × 1m）で「銘旌」[16]を用意し、「扶銘文」という祭文を書く。11時に礼儀先生が霊堂の前に祭文を読み上げ、東家が霊堂

前の庭に銘旌を立てる。

〈党家・親戚・莊員の弔問〉　党家の人々は饅頭一二個、香典二〇〇元（多数）、冥幣を朝から持ってくる。11:00から親戚が続々と弔問に来る。まずは死者の嫁いだ娘、死者夫の嫁いだ姉妹、婚家の姪など下位親戚が弔問に来る。この人たちが青布衫を着用し、霊堂の前で大きい声で泣き叫ぶ。その際、彼女たちの配偶者などの関係者が饅頭一二個、香典二〇〇〇元（娘）、花輪などを差し上げる。その後、喪主から孝をもらう。娘、死者夫の嫁いだ姉妹、婚家の姪などが七尺の長被り孝で、彼女たちの配偶者などの関係者が白綿布の帽子である。喪主から孝をもらった娘と婿が死者の家族と同様に霊堂の死者の遺体の両側に跪く。

次は死者の実家の姉妹とその配偶者など関係者である平等親戚を東家の「迎客」の人が喪家の家まで迎えに行く。喪家に入ると、霊堂の前に三回礼拝し、饅頭十二個、香典五〇〇元を差しあげる、その後東家の案内で食事の席に座る。

続いては死者の実家の兄弟と甥などの上位親戚である。上位親戚を迎えるため、東家が家のドアの前に迎え用のテーブルを用意し、その上に箸２膳と酒を置く。死者実家の人が到着すると、東家は死者実家が持つ荷物を預かり、酒２杯を勧誘して飲めさせる。喪家に入ると、霊堂の前に跪いて泣く。その後、東家が家の中に用意した席に死者実家の人を案内する。

最後は莊員が弔問に来る。莊員が喪家に入り、死者の霊堂の前に礼拝し、洗面器盛り小麦粉、香典一〇〇元（多数）、冥幣を差し上げる。その後は東家の案内で席に座る。

〈弔問宴〉（11:00）　祭奠に来る親戚（三種の親戚）、莊員などの弔問客と宗教者と職能者に料理を出す。しかし、上位親戚には弔問宴を象徴する「全盘」という料理を出さない。

〈験孝〉（15:00）　東家が喪家の庭に座席、タオル、箸、酒などを用意し、死者の長男が家族、死者の娘とその関係者（婿、息子）と党家を連れ座席の前に跪く。喪主が死者の実家の人に付き合いで正屋から庭の座席に移動し、喪主より死者実家の人々に酒を勧誘する。その後、死者の弟である張守義と甥である張啓元は骨主として死者生前への対応、死者の死因、病気の治療過程などを聞く。それについて喪主が全部答える。その後、骨主と喪主が霊堂に入り、死者の遺体を検分する。遺体に問題がないと確認したうえ、骨主が寿衣をさらに２枚を着せと命じた。

本事例の死者の家族は生前の死者に親孝行したので、骨主から非難は特にない。

その後、死者の実家の人が霊堂の前に礼拝し、喪主から孝をもらう。孝は男性が白綿布の帽子で、女性が７尺の長かぶり孝である。その後、弔問宴を食べ、家に帰る。

九月十二日【死亡後四日目】

〈弔問と謝東〉(11:00～15:00)　前日に弔問に来られなかった親戚、荘員の弔問を受け、午後は東家を感謝するための「謝東宴」を出す。

〈大祭〉(16:00)　家族全員、２人の喪主、党家（死者の夫の兄弟とその関係者）、死者婚出した娘と姪とその関係者などの人々が霊堂の前に跪く。礼儀先生は喪主からそれぞれの視点から死者を哀悼する文章の祭文を読み上げる。その後、長男、次男、三男、長孫、家族他の成員、党家の成員、娘、姪の順で一列に並んで厨房まで跪く。そして、厨房から宴の料理一品ずつ死者の霊堂に運び、息子の手で少しずつ空き皿に取り分ける。そのあと、礼儀先生の指示で喪主は大きな布で霊堂の前のドアを隠す。礼儀先生の号令で演奏する。その後、料理を霊堂から厨房まで下げる。跪いている人々が手で少しずつ取り食べる。

〈転経〉(18:00)　５人の陰陽先生が霊堂の前にお経を唱えたあと、庭の真ん中に用意した高いてテーブルに登り、そこでお経を唱える。そのうちに家族と血縁関係が近い党家の人々が一本ずつの線香を持ち、庭に隊列でぐるぐる回る。この際、陰陽先生が使う供物は「香料、花、饅頭、茶、布、果物、水、宝珠、蠟燭、米、金銭」と大きな容器に入れた花を刺している饅頭とナッツである。儀礼が終わる際、礼儀先生が饅頭とナッツなどを家族の人に投げ込める。

〈送盤纏〉(19:00)　死者の娘と姪の婿は彼らが準備したダンボールに入れた冥幣を持ち、陰陽先生が呪語を唱えたあと、家を回って走る。

〈送亡〉(19:10)　唢呐匠が先頭で、礼儀先生、陰陽先生、家族と党家の隊列順で家の外に出る。村界で冥幣を三箇所で燃やす。その際は家族と党家が跪き、陰陽先生と礼儀先生の作法を待つ。終わると、家に戻る。

九月十三日【死亡後五日目】

〈村人の集合〉(6:00)　唢呐匠が演奏しながら、村に回る。唢呐匠の声を聞こえれば、村の男性青壮年がショベルを持ち喪家に集合する。家族と党家は死者の棺桶をドアのところに置く。

〈納棺〉（6:30）　喪主の指示で家族と党家が水晶棺をドアのところに運び、そこで遺体を棺桶の中に収める。
〈起霊〉（6:40）　陰陽先生が棺桶に多くの作法をし、長明灯を棺頭に置く。その後、村人が棺桶を家から運び出す。家族、党家の男性と村人が墓に向かう。
〈送葬〉（6:50）　家族の女性は孝衣で霊堂の藁を包み、家のところに燃やす。棺桶が家から出たら道路の両側に跪いて泣く。男性のみの葬送隊列は唢呐匠、喪主、花輪などを持ち党家、引魂幡、位牌などを持ち息子、棺桶を運ぶトラクター、他の党家、埋葬にきた村人と宗教者である。村人が各家のドアのところで藁で火をつける。
〈埋葬〉（7:40）　墓地ついた礼儀先生は墓地の神様「後土」様に祭文を読みあげる。喪主の指示で村人が棺桶を墓穴に降ろし、その上に礼儀先生が書いた銘旌を被る。陰陽先生が引魂幡を持ちながら呪語を唱えたあと、三回の土を墓穴に入れる。その後、村人が速やかに棺桶を埋葬する。墓穴の上に土饅頭を積む。
〈埋葬後の帰宅作法〉（8:30）　死者を埋葬したあと、全員が喪家に帰る。死者の息子と孫は村の道路各分路口に跪いて埋葬に来た人を家まで迎える。喪家に帰る「面切」という料理を食べ、それぞれに解散する。喪主は宗教職能者に謝金を渡す。

（四）祭祀儀礼

〈全三〉　埋葬後3時間後、家族、死者の娘・姪とその関係者、喪主、党家が初墓参りをする。その際、家族以外の人が孝を墓地で燃やす。喪家は喪主に饅頭十二個、布二匹、烟草、酒、礼金1,000元を謝礼として渡す。
〈作七〉　死亡後7日目、「頭七」と呼び、墓参りする。その後、「三七」、「五七」、「全七」と49日間墓参りをする。
〈百天〉　死亡後100日目、陰陽先生を呼びお経を唱える。その日は家族、党家、死者の娘も参加する。死者の墓地に石碑を建てる。
〈周年〉　死者が死亡後記念日で毎年墓参りをする。

三、葬礼関与者とその役割

本事例での葬礼の役割は、A家族、B党家、C親戚、D荘員、E宗教者と職能

者について、それぞれ次のように整理できる。

A家族　張守英が三男の家で生活し、長男、次男および彼らの配偶者が生前の張守英を扶養した。三人の息子は張守英の棺桶を準備した。また、張守英が病中の際、三人の息子が順番で看病していた。病院で死亡した後、三人の息子がその遺体を家に搬運し、葬礼のすべてを荘員の喪主と党家の東家に任せる。葬礼を行なう期間、家族は喪主の指示で多くの儀礼を参加するが、葬礼の進行に関する仕事は一切しない。特に孝を着用してから、死者の息子を「孝子」、孫息子を「孝孫」、その配偶者を「孝媳・孝孫媳」と呼び、請亡・送亡・験孝などの儀礼を参加する以外の時間は、死者の遺体を安置する霊堂の両側に跪く。さらに、原則には飲食と会話を禁止されている。つまり、死者の家族は葬礼の費用の負担者であり、葬礼には「孝子」、「孝孫」と「孝媳・孝孫媳」として、「孝を尽くす」という考えで葬礼の運営には何も関わらない。

B党家　死者張守英の夫李氏一族の人々が葬礼実行者の東家を構成し、喪主の指示で葬礼を立ち上げる。党家の葬礼での役割分担は、表１の通りである。死者が死亡後、喪家に集合した党家は葬礼を実行する東家を構成し、喪主の指示を受け葬礼の準備から死者を埋葬するまで関与する。党家が構成した東家は葬礼の重要な労働力で、葬礼を実行する人である。

C親戚　まずは李氏一族から婚出した女性とその嫁ぎ先の下位親戚の役割を見る。死者張守英の娘は生前の死者の寿衣を用意した。また、死者死亡の通知を受け、死亡後三日目に弔問に来る。最も高額の香典を渡す。さらに、死者の家族と同様に棺桶の両側に跪き、様々な儀礼を家族と同様に関与する。上位親戚は葬礼での地位が一番高い。本事例の上位親戚である死者張守英の娘家（実家）の人々に死者の死を通知する際、喪主が「訃告」と「請帖」を持ち、自らに出かけていく。また、弔問に来る際、上位親戚のため迎え用の「接卓」を用意し。験孝の儀礼までは孝を着用せず、家の中の一番いい席に座る。そして、上位親戚は葬礼での一番重要な役割は「骨主」として、「験孝」の儀礼を行なう。つまり、上位親戚は葬礼には喪家にとって一番重要な関与者である。最後は詳細を把握できなかった死者張守英の実家の姉妹とその嫁ぎ先の平等親戚である。彼らには死者の死亡を通知し、葬礼の参加を誘う。弔問にくる際、観衆として上位親戚と葬礼の正当性を判断する。

D荘員　死者張守英と同じ村落に生活する人々である。本事例の葬礼の統括者で

表４　葬礼関与者と死者関係及びその役割

死者との関係		具体の人物	葬礼での役名	葬礼での役割
家族		息子・孫息子とその配偶者	孝子・孝孫・孝媳・孝孫媳	経費の提供者、儀式の関与者
党家		李氏一族の人々	東家（大東）	葬礼運営の執行役者（東家のリーダー）
親戚	上位	死者実家の兄弟・甥	骨主	死者の責任者
	平等	死者婚出した実家の姉妹とその嫁ぎ先の家族	弔問客	葬礼の適切性を判断
	下位	死者の娘・李氏一族女性とその嫁ぎ先の家族	孝女・孝婿・孝姪女・孝姪婿	関与
荘員		同じ村に住む家族・党家以外の人々	喪主	葬礼の統括者
			弔問客	葬礼の適切性を判断
職能者		宗教的職能者	陰陽先生・礼儀先生・アカ	
		技能的職能者	哨吶・料理人	

ある主・副喪主の仕事を喪家が荘員の葬儀経験豊富、品徳を評価された人を選択し、葬礼の全てを任せる。その後、喪主は喪家の意思を受け、その意思を従って葬礼を立ち上げる。また、験孝の儀礼には死者の責任者の骨主に対して、喪主は死者家族の生者を代表者である。喪主は骨主の死者に関する疑問を回答し、骨主と死者家族の関係を潤滑する役割がある。また埋葬する際、喪主は党家と荘員を指揮して、棺桶を墓地まで埋める。一方、２名の喪主に対して、数多くの荘員が葬礼に関わる。まず、葬礼に弔問し、葬礼の弔問者の７割が荘員である。弔問後、験孝の儀礼の様子を見る。また、死者を埋葬する際、荘員の青壮年が主要な労働力である。つまり、荘員から選ばれた喪主は葬礼の最高統括者であり、葬礼の進展を把握し、喪家の利益の代表者である。また、喪主以外の荘員は葬礼の弔問や埋葬の主な関与者であり、上位親戚の骨主の「験孝」の儀礼を目撃し、平等親戚とともに葬礼の正当性を判断する。

Ｅ宗教者と職能者　死者が死亡後、道教を象徴する陰陽先生、儒教を象徴する礼儀先生、チベット仏教の僧侶アカ、哨吶演奏者、料理人などの喪家と関わりがない人を喪主が招請する。宗教者の各自作法は葬礼の重要な組み立て部分である。また、無償で労働を提供する党家と喪主に対して、宗教者と職能者は喪家とは金銭が発生する雇用関係である。

以上により、葬礼に関与した人々が死者との関係性より、表４のような役割りを分担している。

まとめに

青海省湟中県李家山鎮新添堡村で二〇一八年九月に行なわれた葬礼について報告をした。以上の事例からは、この地域の葬礼における担い手について次の５点が指摘できる。

(1) 葬礼の担い手について

葬礼は、莊員・党家・宗教者と職能者によって執り行なわれる。莊員である喪主と党家で構成した東家が中心になって葬礼の準備や運営をする。陰陽先生・礼儀先生・アカ・唢呐匠・料理人など宗教者と職能者は儀礼的な役割と部分的な葬礼運営の役割を担い、家族は葬礼の準備と運営はしない。また、死者を埋葬する際に村落の莊員の青壮年が集まり、喪主と東家を協力して遺体を埋める。

(2) 関与者の役割について

①「家族」の孝行と役割

家族が葬礼の規模を決めるが、運営はしない。葬礼を運営する際、「孝子・孝孫・孝媳・孝孫媳」として、儀礼的の儀式に参加する以外は、死者の遺体の両側に跪く。親孝行のため、基本的には会話と飲食もしない。「験孝」の儀礼の際、骨主から親孝行であるかどうかと判断させる。葬礼の資金提供者である家族は、葬礼での役割は死者に最後の親孝行をすることである。

②「喪主」の呼称と役割

葬礼運営を取りまとめる役である喪主は地縁関係者の莊員から選ばれる。死者が死亡後、家族が同じ村落から葬儀経験が豊富、人望が高い人に喪主の仕事を依頼する。喪主は葬礼の最高統括者として、死者を埋葬するまでは葬礼を取りまとめる。葬礼の運営、儀礼の進行は喪主の責任である。また、「験孝」の儀礼には、会話していけない家族の代わりに骨主の詢問について回答する。文献(注)には、葬礼最高な指揮者である喪主は死者の家族をと確認できるが、青海省の葬礼での喪主は莊員である。喪主という称号は家族から、莊員へ変更したと指摘できる。しかし、このような変化はいつの時代に、中国全体での範囲などを検討する必要

がある。

③「東家」の構成と役割

党家から形成した東家が葬礼運営の執行役である。葬礼運営のため、党家の全員が葬礼に関与し、「東家」として無償で労働力を提供する。「東家」のリーダーとしての「大東」は東家に役割分担を割り振られる。また、「請亡」・「送亡」・「験孝」など儀礼的の儀式には、家族と同様に参加する。

④親戚の分類とその役割

喪家との嫁の授受関係により、姻戚を上位・平等・下位との三種類があり、葬礼への弔問の主要な参加者の一つである。本事例の死者の実家の人々は上位親戚として、葬礼には最高の地位を有する「骨主」を担われる。骨主が遺体と寿衣などの検分、生前の死者への待遇と死因などを家族に詢問した上、孝の着用をする。上位親戚からの「骨主」が死者の死の正当性と家族の親孝行を判断する。本事例の死者の実家の姉妹の嫁ぎ先の人々が平等親戚として、葬礼の進行には特に役割がない。彼らは葬礼に弔問から参加し、「験孝」の儀礼の現場で居合わせて、それを実際に見た目撃者(観衆)である。本事例の死者の娘と死者夫一族の婚出した女性は下位親戚として、弔問から埋葬まで葬礼に関与する。多くの香典を出し、死者の家族と一緒に棺桶を周辺に跪く。多くの儀礼には死者の家族と同様に関与するが、喪主の誘いで宴会には出る。死者の娘と一族の婚出した女性などの下位親戚が死者と血縁関係を持つが、葬礼の運営はしない。さらに、死者の死亡について、婚出した女性は発言権がない。

⑤宗教者と職能者の関与と役割

複数の宗教の宗教者が葬礼には関与する。道教、儒教、チベット仏教など多くの宗教者が葬礼には、各宗教の作法で儀礼を行なう。職能者として、唢呐匠と料理人が葬礼の進行と運営に役割を果たす。しかし、この宗教者と職能者は喪家と長い付き合いを持つ関係ではなく、死者が死亡後から金銭が発生の雇用関係である。

⑥荘員

死者と同じ村落に居住している荘員たちは、喪主以外は葬礼の運営には関与しない。弔問の際、各家の代表が参加する。その後、「験孝」儀礼の現場で居合わせて、平等親戚と同様に「験孝」を実際に見る目撃者（観衆）である。また、死者を埋葬する朝、荘員の青壮年の男性が東家を協力して死者を埋葬する主要な関与者

である。

(3)「喪主」と「大東」について

家族が荘員から喪主を依頼し、葬礼の全般を任せる。また、一族の党家に葬礼の運営を頼む。一族の党家が構成した東家のリーダーが大東で、葬礼運営の実務を担う。葬礼の運営には喪主と大東という異なる二つの代表的な役割があるのか。その理由は喪主が葬礼においては調整役の役割がある。死者と近い関係を持つ大東より、地縁関係者の喪主は以下の利点がある。①家族が孝に集中できるように、葬礼のすべてを喪主が取り仕切る。②地縁関係の喪主は、死者の婚家一族と実家一族のあいだを執り持つ。③「験孝」の儀礼においては、喪主は家族と骨主の意見を統一できる。

(4) 験孝と帰属

骨主による験孝と死者の帰属葬礼は、①党家（血縁）、②骨主の両者が、死者の帰属先を承認する儀式である。①死者に生育した息子がいる場合、その死者を党家が一族の祖先として受け入れるために、葬礼を挙げる。②上位親戚の骨主は、験孝の儀礼において、骨主が有していた死者についてのすべての所有権を喪家に渡す。①党家と②骨主の両者の承認を受けることで、死者は、族譜に名前が載り、祖墳に埋葬される。

(5) 女性の帰属

婚出した女性とその女性の息子の葬礼では、上位親戚が骨主として験孝を行なう。婚姻することで、女性は婚家（喪家）に入り、その子供は婚家の一族を名乗る。しかし、葬礼における骨主の立ち位置からは、女性が婚出した後も、その実家が女性とその息子に対して生命福祉などの権利を有する。その権利は験孝によって喪家に移譲される。婚出した女性とその息子に対しても、実家が一定の権利を有していることから、この地域においては、男系制度が強く、またその制度が婚出した後も維持されていることがわかる。

注

(1) 二〇〇四年に出版した『中国民俗大系・青海民俗』と馬延孝が青海省漢民族の葬礼について

書かれている。その内容はあくまで、概説的に紹介したものに過ぎず、研究の視点に立って調査されてない。

(2) 西寧市は、都市部である西寧市区（城中区、城北区、城西区、城東区）、市区と接する三つの県（湟源県、湟中県、大通県）の「一市三県」を管轄する。

(3) 川とは、山と山の間にある平地の地域のことを指す。

(4) 中国では、結婚しても、夫婦は各自で自分の名前を使う。しかし、女性が死亡した後には、自分の名前の前に夫の姓氏をつける。本事例では死者の本名が張守英（チョウ シュエイ）であるが、死亡した後、夫の名字を付けて、李氏張守英となる、夫の一族の族譜にも李氏張守英と書かれる。後文は李氏を省略し、張守英と書く。

(5) 「党家」は死者(死者が女性の場合は夫)と共通の祖先を持ち血縁関係がある血縁党家と親族関係を結盟した村人の結盟党家の二つがある。血縁党家は死者（死者が女性の場合は夫）と一族の男性（始祖の男性子孫、具体的には祖父の兄弟、父の兄弟、自分の兄弟）とその配偶者と家族である。ただし、注意するべきことは死者（女性の場合は夫）の一族の女性（始祖の女性子孫、具体的には祖父の姉妹、父の姉妹、自分の姉妹）が婚出している場合、婚出した女性とその配偶者と家族は血縁党家にはならず、親戚になる。結盟党家は、死者（女性の場合は夫）の一族が村落での血縁党家が少ない場合に、同村落の他の氏族の人を選んで一族同士とみなしあう党家（一族）の関係を結盟し、葬礼だけでなく、生活での多くの行事や労働に相互扶持をする。本事例の党家は全員が血縁党家である。本事例の死者一族は当村には多数派なので、党家の人々の手で葬礼を運営できる。2016年に調査した湟中県攔隆口鎮峡口村の事例には、死者一族は村の少数派で、党家の手で葬礼を立ち上がれないため、結盟党家を依頼して葬礼を行われた。

(6) 人が死に臨む際、あるいは死亡後、家族は同じ地域（村）から全く血縁・婚姻関係がない他人に喪主の仕事を任せる。喪主は死者の家族の依頼を受け、死者家族の意思を従って最高指揮者として葬礼を運営する。喪主の人数は事例によって異なる。特に、女性の死者に寿衣を着せた女性にも女性喪主と尊称する。つまり、事例によって喪主は男性喪主と死者に着替えた女性喪主がある。男性喪主は葬礼では東家を管理、統率する上葬礼を進行させる。女性喪主は死者に寿衣を着替え、葬礼参加者が着用する孝（喪服）を縫う。喪主は大東に葬礼に必要な品物の購入、霊堂・喪家の設営など準備段階の仕事を指示する。また、弔問客の名前を確認し、死者との関係性を判断の上、孝（喪服）を配り、それぞれの弔問客が食事の時の席順なども案内する。その後、「験孝」の儀礼では家族の代わりに骨主の質問に答える。埋葬の時も、死者の遺体を棺桶の中に納める。さらに、喪家に集合された男性荘員を指示した上、死者を埋葬する。

(7) 礼儀先生である李爾偉は1939年に生まれ、青海省湟中県李家山鎮河湾村の村民である。1994年までは教職を務め、退職のあとは西寧市を中心に葬礼の礼儀先生として活躍している。本事例の五人の陰陽先生の詳細はすべて把握できなかったが、陰陽先生代表者の景占禄の情報を紹介する。景占禄は男性、青海省湟中県李家山鎮新添堡村の村民である。1967年に生まれ、父に陰陽先生の作法を教われた。現在、西寧市を中心の葬礼に関与する。唢呐演奏者の呂旺福は青海省湟中県李家山鎮大路村の村民であり、劉得龍は下油房村の人である。唢呐を演奏できるので、葬礼によく関与する。

(8) 孝は喪服のことを指す。詳細は拙稿「中国青海省湟中県における漢族の葬礼関与者と「寿衣」と「孝」」、『伝承文化研究』第十六号（2019）を参照。

(9) 東家（dōng jiā・ドンジャー）は死者の息子が党家の人々に死者の死亡連絡をしたあと、喪家に集めて構成されたものである。一族の成員が亡くなると、血縁の党家は全員が東家になるが、結盟の党家には、死者の息子が東家の役割を依頼に行く。本事例の東家は全部血縁の党家で構成した。
(10) 中堂は家の中央に位置する部屋である。中堂には神様・祖先を奉る。また、小麦粉など主要な食品を入れる戸棚も置く。
(11) 水晶棺は遺体の腐敗を防ぐため用いる中身が見える冷蔵庫である。
(12) 本来は東家の人々が親戚の家まで死者の死を通報し、葬礼への参加を誘う。電話など通信手段の普及伴い、電話からの通知することが普通となった。しかし、本事例みたい、上位親戚には電話で死亡のことを通報するが、葬礼への参加誘いは喪主が実際に訪ねて行く。
(13) 対聯は対句を記したものを紙などに書き、門の両脇に貼るものである。建物の装飾のひとつであり、慶弔時に一時的に貼るものと、恒常的に掲示するものがある。対聯は主に四種類がある。春節の春聯、結婚の祝う喜聯、祝寿の寿聯、葬礼の哀聯。白い哀聯以外は全部の色は赤いである。しかし、死者があった家の初めて春節は緑色の春聯を使う。春聯、喜聯、寿聯で全部祝福の言葉が書くが、挽聯は死者の評価や哀悼などの言葉を書く。一幅の対聯は上聯、下聯、横批で構成する。
(14) 引魂幡は陰陽先生が赤布で作った幡である。その上に死者の生年月日と死亡時間などを書き、死者の魂に導く役割があると言われている。死者を埋葬後の百日目は引魂幡を墓地に燃やす。
(15) 哭孝は死者の死を悲しんで泣き叫ぶこと。家族の女性、娘と女性親戚が哭孝する場合が多い。
(16) 銘旌は礼儀先生が死者の姓名や所属や功績などを記した旗で，霊堂前の庭に立てる。死者を埋葬する時、棺桶の上におかれて埋める。本事例の銘旌には「恭挽　中华人民共和国公民是故李母张守英太君寿近古稀相龙享年六旬晋七（右）抚儿育女功德圆满（中）贤妻良母懿德淑范（左）终前务农礼仪治家跨鹤归真之铭旌」と書かれている。

参考文献

秦兆雄　2005『中国湖北農村の家族・宗族・婚姻』　風響社
田村和彦　2006a「陝西省中部地域における死の儀礼――漢民族の葬儀に関する人類学的報告」『文明21』第一七号
山本恭子　2014「現代中国における葬礼習俗の変化と伝統継承の担い手―江蘇省北部地域における聞き取り調査から―」『中国21 特集　葬送という文化』愛知大学現代中国学会編